

1 はじめに

近年、大学のユニバーサル化、情報化の進展、グローバル化などの様々な社会状況の変化に伴い、大学には多様な学生が溢れている。そのため、学生の抱える悩みも多様化し、学生相談の利用件数が増え、担当者の過重負担が指摘されている。

一方、学生相談の相談事例に対する客観的分析はあまり行われていない。客観的分析により知見を得て、学生相談に活用することができれば担当者の負担を軽減できる。しかし、相談事例には複雑な特徴があり、データベース化されていないのが現状である。

本稿の目的は、学生相談の相談事例を高度な分析ができるように構造化して表現することである。また、これは知識表現の分野への技術的貢献が期待できる。

2 学生相談と相談事例の構造

学生相談は学生を対象とするカウンセリングであり、以下のような流れで行われる。1. 悩みを抱えた学生が来談する。2. 相談面接を行う。3. 相談の内容を記録する。4. 継続する場合 2, 3 を繰り返す。

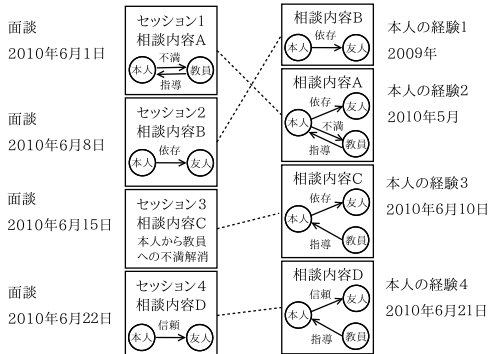


図 1: 相談構造の例

相談事例の大きな特徴について図 1 を用いて説明する。1 回の面談をセッションと言う。セッションは面談の時系列に対応するが、その内容は本人の想起に応じて過去の事柄が順不同で述べられる。図 1 ではセッション 1 で内容 A、次のセッション 2 で内容 B が語られるが、本人の経験した時間軸では内容 B の方が A よりも昔の出来事である。このように、担当者の記録による時系列と本人の経験による時系列とは異なる。

また、相談内容には本人とその周辺の人物との関係が重要な事項となる。そして、その関係構造は累積的に変化していく。図 1 ではセッション 1~4 で判明した別々の関係が、本人の経験 1~4 に反映して変化している。このような人間関係の変化を本人の経験による時間軸に基づいて扱う必要がある。

3 相談記録システムの設計

2 章で述べたような複雑な構造を扱える相談記録システムを設計した。提案したスキーマを図 2 に示す。

矢印は始点にある属性が終点にある属性を外部キーとして参照していることを表す。セッションの日時(相談日時)だけでなく本人の経験した日時(実時間)も記録することで時間軸の違いを表現できる。人間関係は主格から対格への有向な関係で表し、開始と終了の実時間を参照することで累積的变化を表現できる。

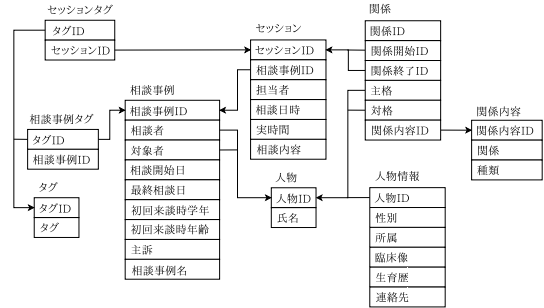


図 2: 相談事例のスキーマ

設計した相談記録システムのメインとなる画面を図 3 に示す。画面左には各セッションの日付と内容の 1 行目が表示され、その中から 1 つを選択すると詳細が画面右に表示される (a)。時間軸による並び替えができ、人間関係のグラフも見る事ができる (b)。

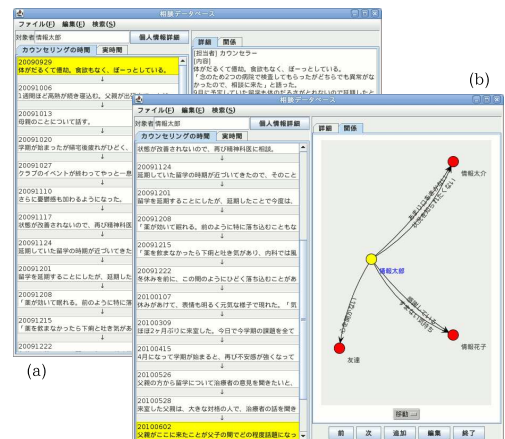


図 3: ユーザーインターフェイスのメイン画面

4 まとめ

本稿では、学生相談事例をデータベース化するための表現方法を提案し、学生相談記録システムを設計した。また、提案したデータ構造がどれだけ相談事例を表現できるか、あるいはできないかを明らかにするために、「学生相談事例と心理臨床」[1] に紹介されている相談事例をデータベースに入れ、評価を行った。その結果、1 度のセッションで複数の時間的場面が述べられた場合や、想起による日時が曖昧な場合は表現できないという課題が見られた。加えて、時系列を考慮した類似度の計算などの分析方法の考案や秘匿性の確保などが今後の課題として挙げられる。

参考文献

[1] 河合 隼雄, 山中 康裕, 小川 捷之「学生相談と心理臨床」, 金子書房, 2005